

養護学校における支援ツールの活用と教員研修

—— 支援ツールに関する教員アンケート調査の結果より ——

武藏博文・浅川義丈*

The Teacher Training and Practical Use of Support Tools in a School for Mentally Retarded Children
As a Result of Teacher Questionnaire Survey about Support Tools

Hirofumi MUSASHI, Yoshitake ASAKAWA

E-mail: musashi@edu.u-toyama.ac.jp, yoshisan@fuzoku.toyama-u.ac.jp

要約

発達障害児者への支援の方法として、支援ツールによる支援がある(武藏, 2006)。これまで、富山大学人間発達科学部附属養護学校では、支援ツールを活用した児童生徒への教育を学校研究課題としてきた(富山大学教育学部附属養護学校, 2004b)。本報告では、支援ツールを活用することが教師にもたらす効果を明らかにすることを目的とした。附属養護学校教員17名を対象として、支援ツールに対する意識、児童生徒への教育活動での支援ツールの活用、教員自身の研修と支援ツールの関連についてアンケート調査を行った。教員にとって支援ツールを研修し活用することの意義と課題について検討した。

キーワード: 支援ツール 積極的な行動支援 応用行動分析学 教員研修 発達障害

Keywords: support tools, positive behavior support, applied behavior analysis, teacher training, development disorder

はじめに

発達障害児者に対して、ABA(応用行動分析学)に基づいて、地域での生活やコミュニケーションに対して積極的な行動支援がなされてきた(小林・山本・加藤, 1997; 山本・池田, 2005)。こうした理論的背景に基づきながら、発達障害児者が主体的に活動するために必要な具体的な手立て、支援のためのモノ・手段に焦点を当てたものとして、「支援ツールによる支援」がある(武藏, 2006)。

支援ツールとは、支援者が共通理解を深めるための手段(協働ツール)、本人が分かって動けるための手がかり(自発を促す手がかりツール、実行を助ける手がかりツール)、認め合う関係をつくる評価記録(交換記録ツール)から構成される。そして、発達障害児者本人が自ら利用できる刺激布置・機会を社会環境に構築すること、社会環境側から認められやすい反応型・産物をもつ発達障害児者の行動を継続的に社会環境の注目下におくことを支援方略としてきた。

富山大学人間発達科学部附属養護学校では、平成

8から16年度まで「一人一人の教育的ニーズに応じた支援はどうあるべきか」という研究主題を設定した。第一次研究(平成8から10年度)は「家庭でも使える支援ツール作り」、第二次研究(平成11・12年度)は「個性を生かす支援ツールと環境づくり」、第三次研究(平成13・14年度)は「個別の指導計画・支援ツール・児童生徒を取り巻く環境」、第四次研究(平成15・16年度)は第三次研究の継続としてきた(富山大学教育学部附属養護学校, 2004b)。このように一貫して、支援ツールを活用した教育実践を進め、「児童生徒が自立的な生活を送るために」「積極的に行う対応」を強調してきた。

こうしてなされた教育実践は様々な形で公にされた(例えば、富山大学教育学部附属養護学校, 2001; 2004a)。発達障害児者への指導・支援の方略としても有効性が示されている。

しかしながら、児童生徒に対して支援ツールを使用し指導・支援を行っている教員の側にどのような効果があるかについては十分に検討されていない。教員の側はどのような意識に基づいて支援ツールを使用しているのか、児童生徒が支援ツールを使うことおよびその指導・支援の結果に対して、どのよう

*富山大学人間発達科学部附属養護学校

な評価を下しているのか、今後の教員自身の教育実践に支援ツールをどのように生かしていくのか等である。発達障害児者への指導・支援の方略としての有効性を検討する上で、教師の側の要因を検証することは欠かせない。

本報告では、児童生徒への指導・支援において、教員が支援ツールを活用することにより、教員の側にもたらされる効果について検討することを目的とした。

方法

1. 対象者

富山大学人間発達科学部附属養護学校で、2004年度に、小学部・中学部・高等部のいずれかにおいて、担任または副担任をしていた教員17名であった。

2. アンケート調査の内容

普段の授業や家庭への支援で使用している支援ツールについて、教員の意識を探ることを目的として、「支援ツールに関する教員アンケート調査」を作成した。その調査項目を表1に、アンケート用紙を資料に示した。

問1から問3は、支援ツールに対する教員自身の意識を問うものである。問1は、支援ツールによる支援を知ってから年数を選択肢で回答する項目である。問2、問3は、支援ツールに関しての意欲や関心、理解について、教員自身の判断を五件法で回答する項目である。

問4から問6は、教員が担任した児童生徒への指導・支援と支援ツールの関係を問うものである。対象となった教員が担任した学級の中から、無作為に3から4名の児童生徒を抽出し、その個別の指導計画にあげられた長期目標と支援ツールについて質問した。問4は、児童生徒の個別の指導計画を達成するために用いた支援ツールについて記述する項目である。問5は、その個別の指導計画の長期目標の達成度合いを五件法で回答する項目である。問6は、用いた支援ツールの作成経緯を選択肢で回答する項目である。

問7、問8は、児童生徒に対して行った支援ツールによる支援の効果を問うものである。問7は全般的な評価を、問8はより詳細な評価をそれぞれ五件法で回答する項目である。

問9から問11は、支援ツールで支援を実施しにくい児童生徒の問題、支援ツールによる支援での困難さや課題、さらに、今後に必要なとされることについて、自由記述で回答する項目である。

表1 支援ツールに関する教員アンケート調査の項目

1. 教員の支援ツールに対する意識
問1. 支援ツールを知ってから年数
問2. 支援ツールづくりへの意欲や関心
問3. 支援ツールへの理解
2. 児童生徒に対しての支援ツール
問4. 児童生徒の「個別の指導計画」と導入した支援ツール
問5. 児童生徒の長期目標の達成度合い
問6. 児童生徒の支援ツールの作成経緯
問7. 児童生徒への支援ツールによる支援の全般的評価
問8. 児童生徒への支援ツールによる支援の詳細な評価
問9. 支援ツールによる支援しにくい児童生徒
問10. 支援ツールによる支援での困難さ・課題
問11. 支援ツールによる支援の今後の方向
3. 教員にとっての支援ツール
問12. 教員が支援ツールによる支援から得たものの行動的な側面
問13. 教員が支援ツールによる支援から得たものの認知的な側面
問14. 支援ツールによる支援の普及
問15. 目標とする教師像への自己研修

問12、問13は、教員が支援ツールによる支援を学んで行うことにより、教員自身が得たことについて問うものである。問12は行動的な側面、問13は認知的な側面をそれぞれ五件法で回答する項目である。

問14、問15は、支援ツールによる支援の普及と自己研修について問うものである。それぞれ選択肢で回答する項目である。

3. アンケート調査の実施

対象となる教員に、アンケートの趣旨を説明した上で、アンケート調査用紙を配布し、後日回収した。アンケート実施期間は2005年9月であった。

4. アンケート調査の回収および結果の処理

対象者全員からアンケートを回収できた。選択による回答は単純集計した。記述による回答は重複を避けて整理した。

結果

1. 教員の支援ツールに対する意識

1.1. 「問1. 支援ツールを知ってから年数」

対象者の70%（12名）は支援ツールを知って5年未満であった。この結果を図1に示した。ほとんどの教員が附属養護学校に異動してきてから、支援ツールについての研修を受けて、学んでいることが

分かる。附属養護学校では、校内研修会により、支援ツールについて研修するだけでなく、先輩教員からアドバイスを受けたり、過去の事例や書籍を追試しながら、実践を通して支援ツールを学んでいた。

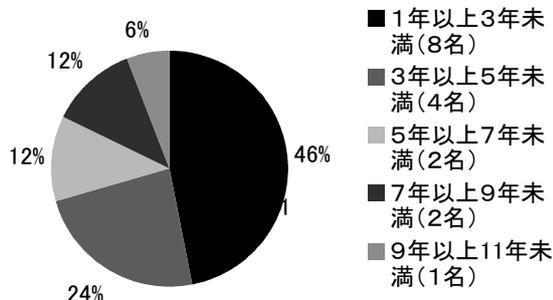


図1 問1. 支援ツールを知ってどのくらい？

1.2. 「問2・3. 支援ツールへの意欲や関心、理解」

「大変意欲・関心をもてた」「意欲・関心をもてた」を合わせ、94%（16名）が支援ツールづくりに意欲・関心を持たたと回答した。この結果を図2に示した。問3では、対象者全員が支援ツールを「理解できた」と回答した。個々の教員の理解に違いはあるだろうが、それでも、全員が「理解できた」と回答したことが注目に値する。

附属養護学校内での普段の教育活動の中に、支援ツールが広く活用されており、身近な実例を通して学ぶ機会がある。加えて、教員自身が担任した児童生徒に支援ツールを試す機会があり、その効果を確認できたためと考えられる。

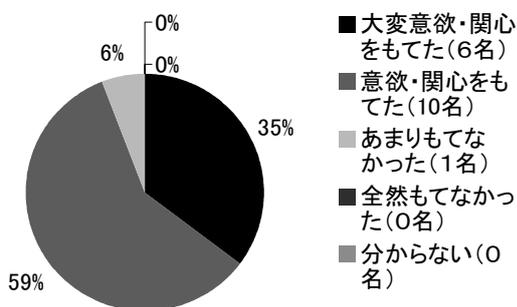


図2 問2. 支援ツールに意欲・関心を持たた？

表2 作成された支援ツールの例

	会話を広げるコミュニケーションブック
	めくり式の歯みがき手順表
	見通しをもって活動に取り組むためのスケジュール表
	イライラしたとき、困ったときの対応の方法が書かれたマナーブック
	自分でチャレンジしたことを記録して貯めていくチャレンジ日記

2. 児童生徒に対する支援ツール

2.1. 「問4. 児童生徒の「個別の指導計画」と導入した支援ツール」

対象となった教員が担任した学級から、無作為に3から4名ずつ、計32名の児童生徒を選び、個別の指導計画の長期目標を書き出した。書き出された長期目標は全部で86件であり、選ばれた児童生徒一人に3つ程度の目標が立てられていた。

学部や児童生徒の年齢や障害の程度により、個別の指導計画の長期目標も異なるが、その一例は次のようである。コミュニケーション（例えば、言葉で要求や簡単な話のやりとりができる）、基本的な生活習慣（例えば、ひとりではみがきをすることができ）、自律性（例えば、時間を意識して活動に取り

組むことができる)、健康と安全(例えば、イライラした時や困ったときに自分で落ち着ける)等である。

これらの書き出された長期目標(86件)を達成するための具体的手立てとして、支援ツールを導入している割合は83%(69件)に及んだ。1つの長期目標に対して、複数の支援ツールを組み合わせる指導を実行している場合もあり、アンケートに記された支援ツールの総数は109個であった。様々な支援ツールが活用されていた。その一例を表2に示した。

2.2. 「問5. 児童生徒の長期目標の達成度合い」

支援ツールを導入した児童生徒の長期目標(69件)のうち、「達成した」「おおむね達成した」をあわせ、70%(45件)で長期目標を達成できたと回答があった。この結果を図3に示した。支援ツールを導入していない場合との比較はないが、児童生徒の長期目標を達成する上で、欠かせない手段となっていると言えるであろう。個別の指導計画は、一人ひとりの児童生徒の長期・短期目標や支援の方法をまとめたものであるが、具体的な支援の手立てとしての支援ツールを加えることで、支援の実行性を高めることが可能となるであろう。

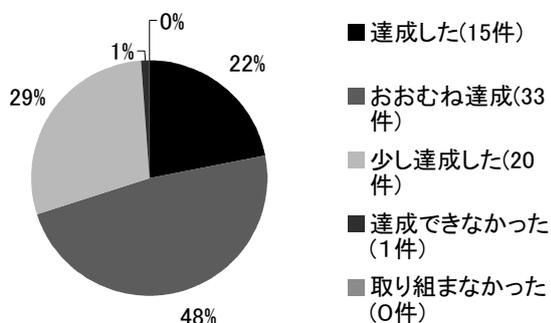


図3 問5. 児童生徒の目標を達成できた？

2.3. 「問6. 児童生徒の支援ツールの作成経緯」

対象者が児童生徒の長期目標を実現するために導入した支援ツール(109個)をどのように作成したかをまとめて図4に示した。

他の教員や児童生徒が使っているものを参考にして、担任した児童生徒に合わせて改良した「追試・改良」が35%(38個)、他で使用しているものと同じように実践した「追試」が22%(24個)で、あわせて6割近くを占めた。先行事例で効果をあげた支援ツールを試して、その上で、児童生徒の実態にあわせて改良する形がとられていた。支援ツールが障害の程度や特性をこえて、個々の児童生徒にあわせ

て仕立てることができることを示している。

支援ツールの考え方を参考にして、教員が自ら作成した「自作」は21%(23個)であった。研修会や書籍等から学ぶ機会があっても、新たに作成して試すのは簡単なことではないことが示された。

また、以前からの児童生徒が使用していた支援ツールを引き続き使用した「移行」が8%(9個)、引き継いだものを改良して使用した「移行・改良」が5%(5個)で、あわせてほぼ1割であった。児童生徒の長期目標を達成するために学年を超えて引き継がれることも示された。

「その他」の9%(10個)は、市販のキッチンタイマーやカウンター、携帯電話、VOCA(ボカ; 携帯用意思伝達機器)を使用したものであった。

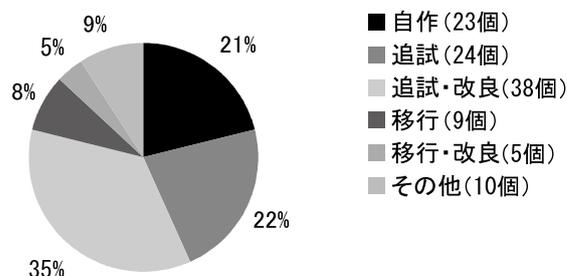


図4 問6. 支援ツールはどのように作った？

2.4. 「問7・8. 児童生徒への支援ツールによる支援の評価」

支援ツールによる支援の全般的な評価(問7)は、対象者全員が「有効である」と回答した。より詳細な評価(問8)はまとめて図5に示した。

児童生徒が支援ツールを使うことにより、「自立を促す」「主体的に行動できる」「行動を行いやすくなる」という評価が高かった。次いで、「生活の質が向上する」「手がかりで自発的に行動する」「褒められ認められる」があげられた。

児童生徒が、支援ツールを使ってでも自ら取り組み、分かって行動することが、社会自立や主体性をもった生活につながると、すべての教員がそろって考えている点は注目に値する。

実践を通じて、個々の教員が支援ツールによる支援の効果を実感しているためであろう。教員集団の共通した児童生徒への支援の考え方がバックボーンにあり、これがさらに、支援ツールによる支援を深めるものとなっている。

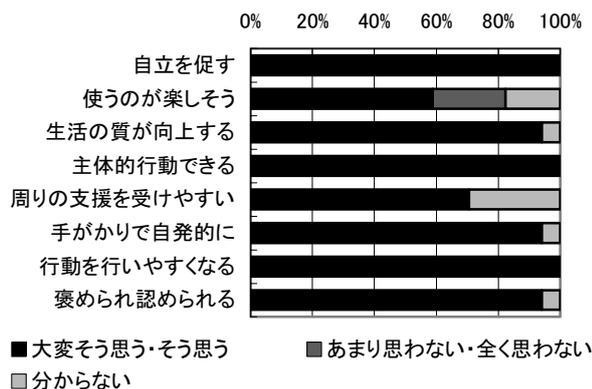


図5 問8. 児童生徒が支援ツールを使う上での評価は？

2.5. 「問9. 支援ツールによる支援しにくい児童生徒」

支援ツールによる支援がしにくい児童生徒が「いる」が56%（9名）、「いない」が38%（6名）という回答であった。「いる」という回答の自由記述の内容をまとめて表3に示した。その理由として、児童生徒の自己効力感、注意持続、気分・耐性、認知・学習能力と、保護者等の支援者側の要因があげられた。

こうした児童生徒に支援ツールを適用するためには、アセスメントと支援ツールの作成・使用方法をより検討していくことが課題である。

2.6. 「問10. 支援ツールによる支援での困難さ・課題」

自由記述で得られた回答をまとめて表4に示した。支援ツールによる支援の困難さや課題として、「児童生徒へのアセスメントや指導に関わること」をあげるものが最も多かった。次いで、「学校内での引き継ぎ、家庭や他機関との連携や移行」をあげるものが多かった。

日頃の教育活動においても、個々の教員が悩みや課題を抱えながら従事していることが分かる。児童生徒の長期目標に応じて、支援ツールを作成して児童生徒に与え、一通りの指導をすれば、ことが足りるのではない。常に変化・成長する児童生徒、異なる要因が影響する家庭や地域に、どのように支援ツールを適用していくのか、そのノウハウを高めていく必要が示唆された。

2.7. 「問11. 支援ツールによる支援の今後の方向」

自由記述で得られた回答をまとめて表5に示した。支援ツールによる支援の今後の方向として、「家

表3 支援しにくい児童生徒の問題

- ・子ども自身の自己評価が低いとき
- ・自分の好きなことしかしない、気に入らないとやってみようと思わない子どもに育ってきている場合
- ・気分が左右されやすい子ども。できるようにはなっても、続かない
- ・やるべきことも、やり方も分かっているが、注意散漫な子ども
- ・色、数、絵、写真、文字が分からず、手がかりとして使えるものが少ない子ども
- ・支援ツールを使うための認知・学習面のレディネスが充分でない子ども。直接的な支援から始めることが必要と感じた。例えば、新入学生、重度の障害の子ども
- ・ツールを地域でも使おうとすることに保護者が抵抗を感じているとき

表4 支援ツールによる支援の困難さ・課題

*アセスメントや指導に関わる問題

- ・本当にその人に適切なのかどうか
- ・一人で使えるようにその子、その子にあわせていくのがなかなか難しい
- ・ステップアップしたり、よりいいものに变化させたりすることが大切だと感じる
- ・支援ツールの使い方そのものを知り、身に付けていく段階の子どもにとっては、手添え等の直接指導の方が能率的、効率的な場面も多い
- ・手順等を示す場合に、今すべきことのみ分かるようにするか、全体が分かる形にするか
- ・視覚的な手掛かりを用いてコミュニケーションする場合、たくさんのカード等を作成しなくてはならない
- ・交換記録ツールに飽きてしまい、だんだん効力が少なくなる児童がいる

*引き継ぎ、連携や移行に関する問題

- ・次年度へどのように引き継ぐか
- ・実習先の職場によっては、支援ツール等導入しづらい
- ・外部への移行の際に、手続きが煩雑だと受け入れてもらえない
- ・家庭、地域、進路先への移行が課題。どのように伝えていけばよいか。学校だけでしか活用されないことがある
- ・家庭との連携や方法の選定に迷うことがあり、導入・継続が難しい。(特にコミュニケーション関連)

*環境の整備に関わる問題

- ・支援ツールのものだけでなく、周りの環境整備や支援者

庭や他機関との連携や移行を促進すること」を期待するものが最も多かった。次いで、「児童生徒が支援ツールを使うことの発展や展開」についてである。回答の多くは、このいずれかに大別された。

連携や移行に関しては、支援ツールの作成や使い方そのもの、支援ツールを通じて児童生徒の支援のポイントを伝える、協働ツールにより児童生徒の移行を図る、支援ツールの方法論の啓発等の多岐にわたる内容が示された。連携や移行をどのように進めていくのか、その中で、支援ツールがどのような役割を果たしていくのか、現在のところはまだ焦点が絞られていない。

支援ツールによる支援の発展・展開に関しては、児童生徒の意欲、年齢、障害の程度や能力に応じた支援ツールの発展の方向が示された。また、生活の中で活用していくために、生活にフィットしたものが求められている。

3. 教員にとっての支援ツール

3.1. 「問12. 教員が支援ツールによる支援から得たもの・行動的な側面」

児童生徒への指導・支援において支援ツールを活用することにより、教員が得られることについてまとめて図6に示した。「システムが分かりやすい」「教員の専門性が高まる」「周りとの連携・協働ができる」「支援が行いやすい」という評価が高かった。次いで、「児童生徒が使うのがうれしい」「支援を行う手がかり」「移行がしやすい」があげられた。

教員は、児童生徒への支援が行いやすいこと、児童生徒への支援に関して周囲と連携しやすいことが、支援ツールによる支援の利点を捉えている。

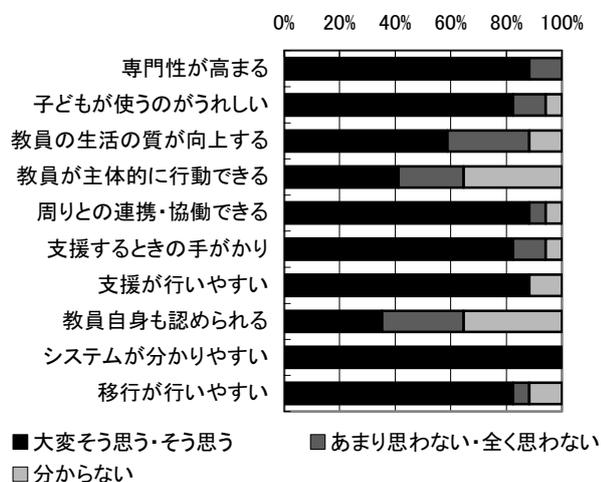


図6 問12. 教員が支援ツールを学ぶ・使うことの評価は？

表5 支援ツールの今後の方向

* 支援ツールの連携・移行に関して

- ・保護者を含めた他の支援者も必要と感じた時に、実態や課題にあったツールを作っていくこと
- ・保護者に支援ツール作成への意識を広げて行くこと、加えて支援の仕方を伝えていくこと
- ・支援ツールそのものの使い方と、使う時のポイント等も伝える方法
- ・使っているツールがどのように本人に有効なのか、環境が変わっても新しい環境の支援者が発展的に使っていけるように伝えること
- ・子どものための支援環境を整え、移行を図るための協働ツールを充実する
- ・保護者や進路先、福祉等の本人を取り巻く諸関係機関が、個別の教育支援計画を元に、支援ツールという方法論でつながり、連携・協働できると良い
- ・目的や有用性、必要性等の啓発（特に協働ツール）

* 支援ツールによる支援の発展・展開に関して

- ・障害の重い生徒に対して、交換記録ツールで、どのように本人の意欲につなげるか
- ・学習や認知面の成長がこれからの低年齢の子どもにとって、無理なくスムーズな支援の手立てとなる支援ツール
- ・生徒によっては自分で考えて判断することを促して力を高めていく場面を設定していく必要がある
- ・支援ツールをシンプルにする、小型化する等児童生徒の生活年齢に合わせたもの
- ・支援ツールを支援の進度に合わせて発展させていき、最終的には一般的にしたい
- ・個の課題に応じたものが作って、使っていけばよい

* その他

- ・普段から生徒のしていることに注目して、自由にそれについて話し合える雰囲気
- ・教師が世の中にある支援機器の知識

このように児童生徒への指導・支援において支援ツールを使うことで、教師自身も得るものが多くあることが示された。このことが児童生徒へ支援ツールを使い続け、さらに改良して進める原動力となっている。

3.2. 「問13. 教員が支援ツールによる支援から得たもの・認知的な側面」

支援ツールを使用するとき、教員がどのような意識でいるのかをまとめて図7に示した。児童生徒が「主体的に行動するように」「物理的な環境を整

えて」「援助を見きわめ適切な段階で」支援するという評価が高かった。

4種の支援ツールそのものや、課題の分析法そのものより、児童生徒の指導・支援に直接に関わるこ

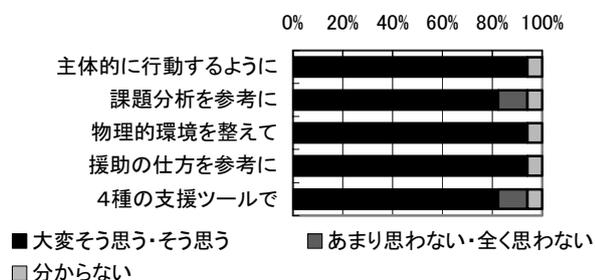


図7 問13. 教員が支援ツールで支援するときの考え方は？

とを念頭においていることが示された。

3.3. 「問14. 支援ツールによる支援の普及」

「大変そう思う」「そう思う」の回答を合わせ、94%（16名）が支援ツールを広めたいと思うと回答した。この結果を図8に示した。その理由としては、「システムをして分かりやすい」「様々な支援の整理と理解のためになる」「児童生徒に分かりやすく目に見える支援」「自発的に動くことが実現できる」

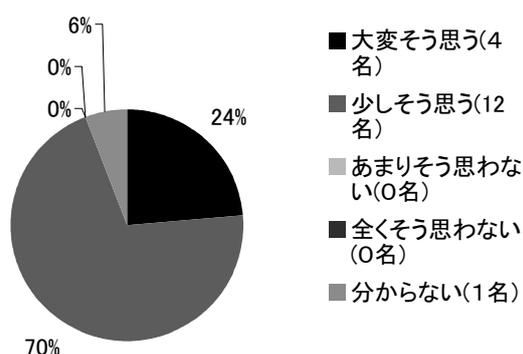


図8 問14. 支援ツールを広めたい？

等があげられた。

3.4. 「問15. 目標とする教師像への自己研修」

「少し前進した」の回答が71%（12名）であった。この結果を図9に示した。その理由としては、「児童生徒が主体的に行動できるための方法論を身につけられた」「支援ツールが有効に働いたときに自分の自信となった」等があげられた。

その一方で、「分からない」という回答が29%（5

名）であった。その理由としては、「自分が目標とする教師像がよく分からない」「自分の願う姿と支援ツールがどのようにつながるのか分からない」等

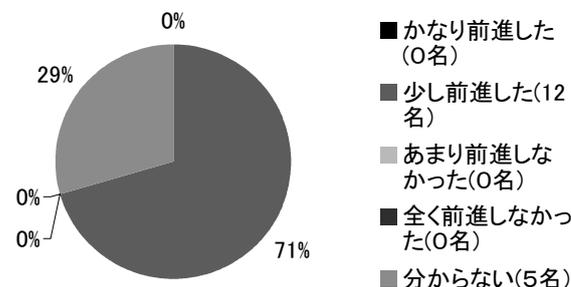


図9 問15. 目標とする教師像へ近づけた？

があげられた。

考察

長年にわたり支援ツールを学校研究課題として取り組んできた富山大学人間発達科学部附属養護学校の教員を対象に、「支援ツールに関する教員アンケート調査」を実施し、17名の教員より回答を得た。

児童生徒の個別の指導計画の実現に向けて、その具体的な支援の手立てとして、支援ツールが活用されていた。児童生徒への指導・支援として、有効性が高く評価された。児童生徒の自立を促し、主体的に行動を行い、行動を行いやすくするものであった。

支援ツールは、児童生徒への指導・支援のみならず、教員の教育活動にも大きな影響を与えていた。支援ツールの多くは、追試あるいはその改良によるものであった。対象児童生徒の個々の違いをこえて、共通した枠組みで指導・支援を捉えることができ、教員集団が協働しあえる可能性を高めるものであった。さらに、教員にとっても、支援が行いやすく、周囲との連携や協働をしやすいシステムであった。教員の指導・支援への意識を高める働きも示された。

その一方で、支援ツールで支援のしにくい児童生徒、支援ツールによる支援で感じる困難さや課題も浮き彫りとなった。

こうした点を改善していくために、今後の課題をまとめる。

第1に、発達障害児童生徒の障害の特性をより精密に捉えるアセスメント方略を開発し、支援ツールの作成・開発とその使用に際して適用していくことが求められる。

第2に、個々の教員のアセスメント能力と、それに基づいて指導・支援を適用する能力を高める実践

研究を続けて展開することである。

第3に、支援しにくい事例についての情報の蓄積である。すでにいくつかの事例報告がある(例えば、高畑・牧野,2004)が、そこでの結果をノウハウとして一般化・共通化していくことである。

第4に、連携・協働に関する実践を深めることである。他機関との連携、保護者や地域の人との協働を多面的に行う必要がある。いくつかの先行実践はある(例えば、武蔵,2004)が、その方略や具体的な連携の手順は明らかにしていくことである。

第5に、個々の教員の連携する力、他機関の支援者や保護者に、指導・支援、さらには支援ツールによる支援についてアドバイスする力、コンサルテーション能力をたかめる実践研究を行うことである。

支援ツールによる支援を広めるには、その一部のみを強調するのではなく、児童生徒の行動のつながりに即して、支援ツールを組み合わせで一貫した支援を進めることにある。これは、教師間の協働がそうであったように、保護者や他機関の支援者との連携でも同様であろう。

今後とも、発達障害児者の自立のために、支援ツールが活用されることを願ってやまない。

謝辞

本論文の作成に当たり、富山大学人間発達科学部附属養護学校の先生方に多大な協力を得ました。また、高畑庄蔵(北海道教育大学札幌校)氏からも貴重なアドバイスを得ました。深く感謝申し上げます。

文献

- 小林重雄(監修)・山本淳一・加藤哲文(1997) 障害児者のコミュニケーション行動の実現を目指す 応用行動分析学入門 学苑社.
- 武蔵博文(2004) 積極的行動支援モデルによる障害児の親支援教室の試み 富山大学教育学部紀要, 58, 93-108.
- 武蔵博文(2006) 支援ツールからのひもとく 自閉症スペクトラムへの支援 特別支援教育研究, No.585, p20-25.
- 高畑庄蔵・牧野正人(2005) 自閉症生徒を対象とした知的障害養護学校と福祉施設が連携した就労支援: 現場実習から卒業後実習への移行支援のあり方 特殊教育学研究, 42(2), p113-122.
- 富山大学教育学部附属養護学校(2001) 個性を生か

す支援ツール 明治図書.

富山大学教育学部附属養護学校(2004a) 子ども生き生き支援ツール 明治図書.

富山大学教育学部附属養護学校(2004b) 平成15年度教育実践研究会要項・研究紀要, p11-17.

山本淳一・池田聡子(2005) 応用行動分析で特別支援教育が変わる 図書文化.

付記

本論文は、企画:寺岡栄一・高畑庄蔵・井澤信三・浅川義丈、話題提供:浅川義丈・中道正・久蔵幸生、指定討論・武蔵博文「自主シンポジウム 支援ツールと研修・協働」(2005)日本特殊教育学会第43回大会 金沢大学.で行った発表をもとに、修正・加筆を加えたものである。

(2006年5月22日受付)

(2006年6月28日受理)

資料「支援ツールに関する教員アンケート調査」

支援ツールに関するアンケートのお願い

☆あなたの立場（平成16年度）

（ ） 学部 担任 副担任（→どちらかを○で囲んでください）

1. 教員の支援ツールに対する意識

問1. 支援ツールを知ってどのくらいたちますか？ ○をつけてください。

- ① 1年以上3年未満 ② 3年以上5年未満 ③ 5年以上7年未満
- ④ 7年以上9年未満 ⑤ 9年以上11年未満

問2. 支援ツールづくりに意欲や関心を持ちましたか？ ○をつけてください。

- ① 大変意欲・関心をもてた ② 意欲・関心をもてた ③ あまりもてなかった
- ④ 全然もてなかった ⑤ 分からない

問3. 支援ツールについて理解できましたか？ ○をつけてください。

- ① 大変理解できた ② 理解できた ③ あまり理解できなかった
- ④ 全然理解できなかった ⑤ 分からない

2. 児童生徒に対しての支援ツール（個別の指導計画と支援ツール）

問4. 児童生徒の「個別の指導計画」の長期目標を達成するために、児童生徒に導入した支援ツールは何ですか？ 新たに作っただけでなく、引き継いだものも含みます。いくつでも、できるだけあげてください。

問5. 支援ツールを導入後、児童生徒はねらいとする長期目標が達成できましたか？

- ① 達成した ② おおむね達成 ③ 少し達成した ④ 達成できなかった ⑤ 取り組まなかった

問6. 上の質問で導入した支援ツールはどのようなようにして作ったものですか？

- ① 支援ツールの4つの箱の考えをもとに、自分で考えて作り出した。
- ② 他の教師や児童生徒がその支援ツールを使っていたので、同じものを導入した。
- ③ 本校の書籍や校内研修などを参考に、児童生徒に合うように作った。
- ④ 以前からその児童生徒が使用していた。それでそのまま引き継いだ。
- ⑤ 以前からその児童生徒が使用していた支援ツールを改良した。
- ⑥ その他

問7. 児童生徒にとって支援ツールを使っの支援は効果的でしょうか？

- ① 大変有効だと思う ② 有効だと思う ③ あまり有効ではないと思う
- ④ 全然有効ではないと思う ⑤ 分からない

理由（ ）

問8. 児童生徒が支援ツールを使うときに、当てはまると思われるものに○をつけてください。

- ① 自立を促すことができる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ② 支援ツールを使っているのが楽しく。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ③ QOLの向上につながる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ④ 主体的に行動できる児童生徒になる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ⑤ 周りの支援者からの支援を受けやすくなる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ⑥ 支援ツールががかりとなり、自発的に行動するようになる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ⑦ 支援ツールがあると、行動を実行するのがより行いやすくなる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1
- ⑧ 支援ツールがあると、より児童生徒が誉められ認められる。
 - 大変そう思う 5 少しそう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

問9. 支援ツールを使って支援しにくい児童生徒はいますか？

①いる

どんな児童生徒？（

）

②いない

理由は？（

）

③分からない

問10. 支援ツールを使った支援で、困ったことや大変なこと、課題だと思われることはありますか？ 自由にお書きください。

問11. これからの支援ツール（および支援ツールを使った支援）に必要と思われることは何でしょうか？ 自由にお書きください。

3. 教員にとっての支援ツール

問12. あなたが支援ツールを学んだり、使ったりするときに、当てはまると思うものに○をつけてください。

①教員としての専門性が高まる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

②支援ツールを作ったり、児童生徒が使っているのがうれしい・楽しい。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

③教員自身のQOLの向上につながる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

④主体的に行動できる教員になれる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑤周りの人と連携・協働することができる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑥子どもを支援する際の手がかりとなり、教員自身が自発的に行動できる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑦子どもへの支援を実行するのがより行いやすくなる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑧教員自身も周りからより認められる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑨支援ツールのシステムは分かりやすい。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

⑩支援の移行が行いやすくなる。

大変そう思う 5 少そう思う 4 あまりそう思わない 3 全くそう思わない 2 分からない 1

